

人権のたいせつさを 考えよう

12月4日～10日は人権週間

徒の人権を侵害するものであることを広く訴え、子供たちが明るく活動できる社会をつくろうというもの。

◎女性の地位を高めよう

「男は仕事、女は家庭」といった男女の役割を固定的にとらえる意識は根強く残存しており、このことが種々の男女差別を生む原因となっています。

◎部落差別をなくそう

部落差別は、日本社会の歴史的發展の過程でつくられた身分差別に由来するもので、今なお結婚を妨げられたり、就職で不公平に扱われたり、日常生活の上でいろいろな差別を受けていることがあり、重大な人権問題となっています。

◎障害者の完全参加と平等を実現しよう

障害者に対する認識は、まだまだぶじゅうぶんであり、諸権利、諸サービスを障害者がじゅうぶんに享受できない事態も現実に生じます。

私たちは、国民の一人一人が、それぞれの人権を確かに尊重できる社会をつくるために努力しようではありませんか。

【高知県人権擁護委員連合会】
【高知 地 方 法 務 局】

同和教育シリーズ

部落に対する誤った俗説②

前回、「部落の人は、秀吉が朝鮮に出兵したときの捕虜の子孫」という考え方は、根拠のない偏見であることを述べましたが、このほかに「部落の人は、人種が違う（その中でも朝鮮人の子孫）」との考え方は、今日でも根強く残っています。

日本と朝鮮半島は、昔から深い関係にありますが、その前に私たち、日本人のルーツについて考えてみる必要があります。

今日の学説では、大和民族という純粋な民族は存在しないと言われています。日本列島に人類が住んだのは、今から数万年以上も前の太古のころからですが、アジアの各地から、多くの民族が移動してきたと考えられています。

例えば、北方系のツングース族、大陸からは中国、満州、蒙古、朝鮮半島の民族、さらに、黒潮の流れに乗って東南アジアの各地から海洋渡来の民族がやって来て、何万年もの間に、これらの人々の血が混じり合ってきた混血の民族が、日本人の

ルーツと言われています。

その中でも、日本と朝鮮半島は、古代から深い関係にあります。崇仁天皇は、四道將軍を各地へ遣わしたと伝えられています。その記事の中に「異俗の人民多く来附せり」とあるように、我が国は、古代から外国と交流し、多くの外国人が日本にきています。

応神天皇の時代に、百濟王は、その臣、阿直岐をして良馬を献上し、その翌年、博士王仁は論語と千字文を献して朝廷に仕え、その子孫は、代々朝廷の文章や記録、財政、大陸文化の輸入に尽くしています。また、秦の始皇帝の孫と称する「弓月君」は、百二十七県の民、三千人を率いて百濟より帰化し、大陸工芸を伝え、その功績によって秦氏の姓を賜りました。その子孫は九十部、二万八千七百七十人となり、奈良、大阪から近畿各地、さらに関東、東海、北陸、中国、九州など、全国に分布。稲荷神社は元來秦氏の氏神です。

高知県にも秦氏の子孫には、有名な人物が数多く出ています。長宗我部氏も秦氏の出であり、また土佐南学中興の祖とされ、今日では学問の神様として尊敬されている公桑山、西南戦争のとき、熊本鎮台司令官として勇名をとどろかせた谷干城も秦氏の出です。

このように、二千年の昔から朝鮮半島からの帰化人は、朝廷の政治に参画し、重要な政務官となり、東大寺の鑄仏をはじめ、朝廷の記録、財政を切り回したのです。

嵯峨天皇の命令で、万多親王が撰じた「新撰姓氏録」という書物で、近畿地方の名家とされた家系を分類してありますが、総数一万一千八十三氏のうち皇別（天皇、皇子のわかれ）三百三十五氏、神別（天地の神の後）四百四氏、藩別（帰化人の子孫）三百二十七氏となっており、天皇家にもその人たちの血筋は入っているのです。

このように、日本国民の血筋の中には、朝鮮民族の血がたくさん入っているのです。被差別部落の人びとを差別する理由の一つに「朝鮮人の子孫だから」とするのは、極めて間違った偏見なのです。

第二十二回同和教育研究大会 被差別部落のない学校。

園の部落問題学習

北窓正明氏（全同教常任委員）

部落を解放する教育を創造しよう——と、十月六日に関係者約六百人が参加して、市民体育館など三会場で、第二十二回南国市同和教育研究大会が開かれました。

午前中の全体会では全同教の北窓正明常任委員が講演。その内容の一部を紹介します。

今日の社会には、部落差別をはじめとする様々な差別が構造的に機能して成り立っており、人それぞれの生い立ちの中にそれらとの出会いが必ずある。

私は大学を卒業して部落の子供たちの通う小学校に就職した。子供たちをばさんで、繁く部落に足を運んだが、人間関係が深まり、信頼関係ができていく中で、私の中にある差別意識や偏見は、音をたてて崩れていった。私が結婚するとき、部落と部落外ということで、それなりに

いろいろとあり、私たちは村中の親戚を説得して回った。私の側にはずいぶんと反対があった。就職などで兄弟や親戚に悪い影響があるというのが反対の理由だった。私にとって大きな支え

だったのは母だった。母に私たちが結婚を告げると、答えて「相手が部落出身だろうと関係ない」という一言だった。母は条件の悪い仕事の中で在日朝鮮人や部落出身の人と一緒に働いてきて、しんどい思いを持っている人が心の底からやさしいということを知っている。明るい所からは明るい所しか見えないが、暗い所からはすべてが見えるのだというところを、被差別の側に身を寄せた感性で、逆に学ばされた。

差別事件は、その背景に直接的な利害の対立、差別意識、心身の不満の鬱積状況の三つの条件が重なったときに出てくる。そこにもそれを差別する手段と

して知識学習の弊害がある。

今日の部落問題や差別問題、人権問題が地域にあるのだ。そして子供を育てていく上で有り余る教育力を持っているのも地域なのだ。とらえていくべきだと思ふ。部落問題、差別問題が典型として教材になることは多いが、日々の暮らしの中にどっぷりと沈み込んでいく人権侵害の実態や差別実態こそが、まさに子供たちが生活との関係で最も身近にとらえられる最高の教材ではないかと思ふ。教材を求めていくプロセスそのものが学習であり、教材化は子供と地域の人々と教師の共同作業として進めることが原則である。その取り組みの中で三者それぞれの

変革があること、共通の財産があること、そして悲惨な部落像のみならず、戦いの姿に触れ合う、雄々しく生きていくその姿に出会うということを大切な視点としてきた。

同和教育を進める上で五つの柱がある。まず、先生方がクラスの最も気になる子供の生活を綴ること。そのことは、なぜ気になるのかという私たち自身の感性や価値観をも問われるからだ。ある会でも、幼稚園の先生

や保母さんは具体的な文字を持たない子供が相手であるだけに、ずいぶんと日常の様子を丹念に取材して報告書を書いてきた。それに対して小学校などの先生は、子供たちが文字を持っていくということに頼りすぎて、逆に言外の意味や行間にある思いをとらえ切れてないのではないかと感じる。

二点目が、地域学習。それぞれの労働の実態や生い立ち、歴史を聞かせていただくことを通して、その人の人間そのものに迫り、その人の生き方を私たちの生き方に照らして生き方を考える。差別の重さではなく、自分たちが向き合っている差別に対してどのような生き方をしてきたのかを比べ、その生き方を地域の教育力として学習内容に取り入れていくべきである。

三つ目は身近な差別問題、四つ目は典型としての差別事件に学ぶ、五つ目は部落史学習である。このような柱、例えば身近な差別問題は子供たちの日々の暮らしの中にある内容にも取材することができる。いじめと差別の問題を例にとっても、現場に起こったいじめを単に子供たち同志の関係としてとらえてい

ったときには根本的には解決をしない。差別との関係でとらえたり、子供たちの日々の生活実態、考えの総態がどうなのかまで深めていかないと、差別の構造、いじめの構造はともに克服できないということが明らかになると思ふ。

歴史学習については最近の成果の中でいくつかの提言がなされている。通史として再編成すること、近現代史を重視すること、悲惨な部落史の強調に終わらず、戦いの歴史に学ぶということ。そのような内容を組み込みながら歴史学習の内容を研究を深める中で作り出していったらいい。

地域の中で、その地域の日々の暮らしの何を大きな価値観として私たちが生きていくのか。それは人権主義に根ざした価値観だと思っている。能力主義や序列主義が大きな価値観としてびびりこっている日本の地域の現状であるからこそ、私たちが人間を大切にすることを最大の価値観にして、人権主義の努力観や人権主義の教育観、人権主義の人生観にまで高め得る地域の教育を作り出していききたい。